加えて，2015年２月には，人文ブックレットとして，『昔話から読み解く人間学 —— 人生の難局を乗り越えるために ——』（新潟大学人文学部，全53頁）も上梓されている。

Google Books によって，新たな研究領域が拓かれたことに伴い，研究地平が細密画のように，格段に精度が上がったことで，活発に研究を展開することができた。また，研究会を開催する際には，決して貸館営業になることなく，主体的な力量を高める機会にしようと，心がけている。

2015年９月９日

（文責：栗原　隆）

〈声〉とテクスト論

研究代表者　高　木　　裕

１．プロジェクト概略

本プロジェクトの目的は，〈声〉の文化が，これまでの歴史の中で，テクストの文字言語との鬩ぎ合いから始まり，制度的なさまざまな制約と葛藤，軋轢を繰り返してきたことを確認するとともに，文学・思想・メディア文化が〈声〉の根源的な力，豊饒な力をいかに再生させるために工夫してきたか，その諸相を例示し，さらに〈声〉から，いかに新しい発想と表現可能性を得てきたかを，具体的に明らかにすることである。そこに新たな人文科学研究の可能性がある。

当面は，〈声〉と制度の様々な関係を，歴史的かつ領域横断的に検討するために，各国文学（日本文学，中国文学，朝鮮文学，イギリス文学，フランス文学，ロシア文学，アメリカ文学），映像論，啓蒙思想などを専門とする研究者をメンバーとし，さらに，従来からのボルドー第３大学の研究グループ（「モデルニテ」）と連携し，国内の他大学の研究者（とりわけ，人文学部と交流協定を締結

している愛媛大学法文学部，岩手大学人文社会科学部）にも参加を呼びかけ，〈声〉に関する国際的かつ領域横断的な共同研究体制を確立し，定期的に国際シンポジウムを開催するとともに，研究報告集を刊行する。

２．参加メンバー（平成25年度）

先田進，鈴木孝庸（新潟大学フェロー），廣部俊也，藤石貴代，佐々木充（新潟大学フェロー），高橋康浩，高橋早苗，平野幸彦，斎藤陽一，番場俊，橋谷英子，鈴木正美，逸見龍生，市橋孝道，高木裕

３．プロジェクトの進捗状況

「〈声〉とテクスト論」研究プロジェクトが，ボルドー第３大学の研究グループ「モデルニテ」と継続して共同で取り組んできた「声･テクスト･制度に関する比較総合的研究」も４年経過した。ボルドー第３大学「モデルニテ」研究グループ（代表：エリック・ブノワ）と連絡を取り合いながら，平成23年以降，共同でシンポジウム，ワークショップを開催してきた。

シンポジウムに参加したフランス人研究者の発表では，支配言語である（あるいは支配言語であった）フランス語で執筆する作家・詩人が，母語である現地語発話にかかわる記憶と経験によって，まったく新しいエクリチュールの創造にいたったこと明快に示すものであった。今日，フランス文学ではなく，フランス語圏文学として語ることの意義は，そこにある。

たとえば，平成23年９月のシンポジウム「〈声〉の制度 ― 継承・障害・侵犯 ―」でのマルティーヌ・ジョブ Martine Job の講演「言語の単一性のもとにおける，フランス語圏の声の多様性」は，旧フランス植民地の国々で生まれたフランス語圏の文学について，言語の単一性に抑圧されていたさまざまな〈声〉が，フランス語と現地の言葉との軋轢・融合の歴史を経て，作家たちの眠っていた記憶を掘り起こし，独特な語り口を創造するに至ったことを示すものであった。

また，昨年３月のピエール・ラフォルグ Pierre Laforgue の講演「言語，声，ポエジー ― エメ・セゼールの『帰郷者ノート』におけるパロールの詩学と政治 ―」は，フランスの植民地マルチニック島に生まれ，ネグリチュード（黒人

性）の文学を提唱したエメ・セゼールの『帰郷者ノート』の〈声〉に関するものであった。この作品では，抑圧からの解放を求める叫び，言葉，そして歌へと〈声〉は反抗の詩（ポエジー）を形成するが，同時に「ノート」である作品は，フランス語という支配言語（ラング）とエクリチュールの制度・枠組みの中に囚われていること，「ノート」のエクリチュールとネグリチュードの〈声〉との緊張関係の中で，セゼールのポエジーは生成しているとラフォルグは指摘した。

これらの講演から，国家言語との相克，異文化との対峙の中で，作家・詩人たちの発語は，主体の記憶に眠っている原初の言葉を掘り起こし，身体に吸収した言葉をはき出し，身体の奥底にある情念・記憶と密接につながっており，この身体的経験がエクリチュールに〈声〉の身体性，生身のニュアンスを取り込むことを容易にしていることを確認することができた。テクスト生成の原点にある〈声〉の体験に対して，当然，テクストと〈声〉の関係で言えば，逆にテクストによって立ち上がる〈声〉，テクストが生成する〈声〉という観点もあるわけだが，2015年３月10日に開催した国際シンポジウムでは，「抒情詩と〈声〉」という基本的なテーマで，これまでのテクストと〈声〉の関係について，研究成果を報告し，再考してみた。

この報告を前に，われわれのプロジェクトと共同研究を行ってきたボルドー第３大学の「モデルニテ」グループの代表であるエリック・ブノワ教授に基調講演をお願いした。

エリック・ブノワ Éric Benoît教授（ボルドー第３大学）：「声のリレー（系譜学・現象学・目的論）」Le relais des voix（généalogie – phénoménologie – téléologie）

この講演では，抒情詩の中の「声」とは何であるのかという問いに答えるために三つの段階で，詩について考察を進め，最初は，「エクリチュール」の段階で，テクストの源流における，声の「起源」l'origine が揺動する場所（「系譜学」あるいは考古学）についての考察であり，二つ目は詩の中において語っている「フィギュール」の段階で，テクストの進行中に詩的な声を発話する主体（声の

「現象学」）に関する考察で，三つ目は「レクチュール（読む行為）」の段階で，テクストの下流において，詩の声がテクストを前にした「受容者」récepteur の声（声の「目的論」）を考察するもので，〈声〉が係留する身体から始まり，声の主体論，そしてテクスト内での生成と，これまでの共同プロジェクトの成果を実にみごとにまとめたものであった。

引き続き開催されたワークショップでは，抒情詩に関する研究報告があり，この第一段階における身体起源の〈声〉について，歌声と詩，朗読と詩，パフォーマンスと詩という角度から，ロシアの詩，アメリカの詩，韓国の詩，フランスの詩を題材に以下の具体的な発表が行われた。

鈴木正美（新潟大学人文学部）
　詩人の声と身体 —— ドミトリイ・プリゴフの朗読パフォーマンス
平野幸彦（新潟大学人文学部）
　"The Philosophy of Adaptation" — ルー・リードの「ザ・レイヴン」について
藤石貴代（新潟大学人文学部）
　抒情と情感 — 金時鐘の詩語について
高木　裕（新潟大学人文学部）
　ネルヴァルの『幻想詩篇』の〈声〉について

抒情詩における〈声〉は起源的に「歌」lyrique の〈声〉から始まったことから，本来，詩的な要素を形成するものではあるが，近代詩，とりわけボードレール以降の近代詩研究では，〈声〉の主体，語りの主体あるいは「語り」そのものに焦点化されがちである。今回の報告では，〈声〉が詩的なるものの生成といかにかかわるのかという根本的な問題について考察が試みられ，身体から躍動して現れる〈声〉の本質的な力，多様な表現力を再確認した。

この研究プロジェクトのもう一つの目的は，〈声〉の芸術あるいは伝承文化の変容を時代の中で考察し，時間（時代）の中で刻々と変わる〈声〉の役割を解

明することにある。この意味では，〈声〉の文化に実践的にアプローチしている芸術家たち（演劇人，作家，詩人等々）の活動から，それぞれの文化のジャンルの中で，〈声〉の役割がどのように変化し，どのように制度と関わっているかを探ることも重要である。

〈声〉の伝統的な制度として，芸能，語り物，歌舞伎，浄瑠璃，朗読，歌唱などがあり，〈声〉の技芸を考察することで，〈声〉の本来的な力，喚起力，音楽性などを再認識・再評価できた。これらの講演会を一般市民に開放することにより，伝統芸能の継承の問題を共有した。

⑴　多和田葉子＆高瀬アキ公演の開催（11月10日）
　　新潟大学総合教育研究棟Ｅ260
⑵　新潟と詩人の系譜－中島悦子講演会（11月22日）
　　駅南キャンパス「ときめいと」
⑶　講演会「越後ごぜ唄と〈声〉の伝統」（11月23日）
　　駅南キャンパス「ときめいと」
⑷　白川昌生と小野田賢三講演会「沼垂ラジオにおける〈声〉と地域コミュニティ」
　　駅南キャンパス「ときめいと」

４．プロジェクトの成果

人文科学研究（新潟大学人文学部紀要）第136輯プロジェクト特集号「〈声〉とテクスト論」平成27年３月所収

⑴「日本におけるスタニスラスラフスキー・システムその２ ― 小山内薫の劇評をめぐって ―」斎藤陽一，横版 pp.５-26
⑵「ドミトリイ・プリゴフにおける詩的言語の実験 ― 声のコラージュから言葉のインスタレーションへ ―」鈴木正美，横版 pp.27-46
⑶「平曲における感情表現 ― シヲリということ ―」鈴木孝庸，縦版 pp.１-18

⑷「引用による本文構成についての覚書 ―『好色酒呑童子』を例として ―」
廣部俊也，縦版 pp.19-33

19世紀学研究

研究代表者　**桑　原　　聡**

プロジェクトメンバー
桑　原　　聡（代表者）
逸　見　龍　生
吉　田　治　代

本コア・ステーション “Institute for the Study of the 19th Century Scholarship” は，これまで同時期に設立した19世紀学学会の事業とあわせ，今日における学知の基礎が19世紀に確立したとする見地から，「19世紀学」を総合的に再検討する作業をすすめてきた。主な活動としては，学内外の研究者によるシンポジウム・研究会の開催と，紀要『19世紀学研究』の発行が挙げられる。

2014年度は，以下の通り，学術講演会とシンポジウムを開催した。

1．日時　2014年11月28日　18時15分～20時
場所　新潟大学五十嵐キャンパス 総合教育研究棟大会議室
学術講演会　日下元及「ナイジェリア文学における歴史認識と民族問題」*

2．日時　2014年12月19日　18時～20時
場所　新潟大学五十嵐キャンパス 総合教育研究棟D201
シンポジウム　「知の饗宴（インテレクチュアル・バンケット ― ルネサンスから初期近代にいたるヨーロッパ思想の水脈）**